

巻頭言

翠園のおかゆ

福田 国彦

大学病院で管理当直をする立場になっている。実際の診療にはあたらないので、特別な事故など無い限り、医局の当直に比べれば楽なものである。同時に、放射線科の医局当直では知りえない病院の中でのちょっとした出来事の処理にあたることがある。

先日は、患者行方不明につき指示をおおぎたいとの連絡を受けた。病院内をちょっと散歩してくると看護婦に言い残して病棟を出た患者が、夕食時刻を過ぎて病棟に戻らないとのことである。患者は、肝細胞癌に対するTAE目的で入院しているので、まんざら放射線科と関係が無いわけでもない。糖尿病性腎症もあり血液透析への導入もかねていると言う。このような時には、病棟から離れたという開放感から遅れているにすぎないのか、患者の背景やら病気の悩みなどに起因するなんらかの「事件」に巻き込まれたのかなどあらゆることを推測してしまう。立場上は、やはり悪い事態を視野に入れて対処しなければならない。自宅に電話したが通じず、娘にも連絡がつかない。本人は、学生時代まで中国本土で過ごしたがその後、日本で暮らしているという中国の出身者である。年齢的にはとうに現役を退いているが、どのような職業に就いていたのかは分からない。日本語は話せるが、長期間住んでいる割にはそれ程上手ではない。会話の途中で都合が悪くなると、日本語が分からなくなり(意識的に?)大声をだすこともあるという。大部屋では同室者と問題を起こすことがあるので、個室に居るという。

おりしも、猛暑が続き、当日も35℃前後あった。脱水になってどこかで倒れている危険もある。糖尿病に対しインシュリン注射を朝・夕施行している患者である。低血糖あるいは食事後に高血糖になっている可能性もある。糖尿病足も患っており、院内でも遠くまで検査に出る時には車椅子を使っているという。こんなに長時間歩けるはずが無い。しかしながら、彼の服薬棚からは夕方服用分の沈降炭酸カルシウムが紛失

しており、本人が持ち出している可能性が高い。確信犯か??

結局、本人が院内を回ってくるのみ看護婦に言い残していること、また、インシュリン注射をしている患者であるにもかかわらず、その時間が過ぎていることより、最寄りの愛宕署に患者行方不明を報告することにした。愛宕署では、電話では不十分なので直接署員を大学まで派遣するとのこと。また、110番もしていただきたいとの要請。これによりパトロール中の警察官全員に行方不明者の捜索願いが伝わるからとのことであった。早速110番し、あらかじめ内容を述べると、患者の背丈など特徴を知りたいと言う。担当医と看護婦に患者の容貌などを確認していると、もう一本の電話が鳴った。丁度、二本の受話器を両手に持つ形となる。電話は警備室からで、患者を確認したので病棟までお連れするとのこと。つながったままの110番には、患者発見をお伝えし丁重におわびをして受話器を置く。愛宕署に再び電話を入れ、お騒わがせした旨おわびをしているところに、ナースステーション前のエレベータが点灯した。果たして、我々が見守る中、ご本人の登場である。迷惑を掛けてしまったらしいというしおらしい態度と共に、好きなことをしてきたという満足感が溢れている。翠園で中華がゆを食べてきたという。本当においしかったと御満悦である。看護婦には翠園のまんじゅうのおみやげまで携えている。

この原稿も管理日直中に書いている。入院患者は、それぞれに身体の不自由を訴えて入院している人ばかりである。背景も皆違う。今日は、これまでのところ特別な連絡は受けていないが、連絡がないから万事OKと言う訳ではない。とにかく、悩みを持った患者が1000人以上も入院しているのだから。

脚注：翠園は香港に本店を置く慈恵医大近くの本格的中華料理店。

(東京慈恵会医科大学放射線医学講座教授)